

## 〈研究ノート〉

## 経営と経済—その字義と語義およびその転換—

中本和秀

## はじめに

「経営」とはどんなものだろうか? 「経済」と「経営」という用語は、1字違いで似たようなものと思われて、その違いがよくわからない、と高校生にいわれることがある。大学進学を目指す高校生が必ずと言ってよいほどの質問に、「経済と経営ってどう違うのですか?」というのがある。つまりほんの一字違いだし似たようなものではないか? 学部や専攻を選ぶとき、経済学部(専攻)にするか、経営学部(専攻)にするか、どちらにしようか迷う、ということがあろうだ。

経済とはどのような意味であるのか? 経営とはどのような意味であるのか? 両者の違いは何か? という素朴な、しかし本質的な疑問に答える必要がある。

そもそも経済とはどのようなもので、経営とはどのようなものか、そしてその違いや関係はいかなるものか。そもそもなぜ、経済は経と済で、経営は経と営なのか? その字の意味と用語の意味とのつながりがわからない。「読んで字のごとく」とはいかないのである。字を見ても容易にその意味が想像つかないのである。そこで、ここではまず、これらの字の字義とこれらの用語の語義、その用語の成り立ちから考えてみる。

それは、なぜ economy に対して「経済」の語をあて、management に対して「経営」との語をあてたのだろうかという疑問でもある。

多くの経営学の教科書は、なぜ「経営」という文字を management にあてたのかは説明せず、経営とは「企業を運営し事業を営むこと」\*と規定している。しかし、問題は、なぜそれを「経営」というのか? ということなのである。

これらの問題を字義、語義、その転換の過程として主な辞典などを頼りに考察していく。

\* 経営学の入門書、テキストのなかで明確に「経営」とは何かを規定しているものは意外に少ない。そのなかで明確な規定をしているものでは、次のように規定している。「企業を運営し事業を営むことを『経営』とよぶことにしよう。『経営』は Administration または Management の訳語で、企業を組織化したり管理したり一定の方向に向けて動かすこと、あるいは企業活動に関する様々な意思決定を行なうことを意味している。」(井原久光『テキスト経営学 [第3版]』ミネルヴァ書房 2008年6頁)。  
なお、「経営(マネジメント)とは『『人々を通じて』、『仕事をうまく』成し遂げること』であるという定義をしている教科書もある(加護野忠男・吉村典久編『1からの経営学』碩学舎 2006年27頁)。

## 1. 経と済と経と営；その字義

ここでは、「経」、「営」、「済」の各々の字義を白川静『常用字解』（第二版）平凡社 2003 年からそれぞれひも解いて確認してみる。

### 【経】

「もとの字は経に作り、音符は<sup>けい</sup>罫。<sup>けい</sup>罫は織機にたて糸をかけ渡し、下部に工の形の横木をつけて糸を縦に張った形で、織機のたて糸をいう。これに対し、よこ糸を緯という。両者を合わせて、事の成り行き、すじみちを経緯という。たて糸はことの基本であるので、儒教で最も基本的で重要なことを書いている書物を経書・経典という。用例としては、「経国」は国を治めること、「経世」は世の中を治めること、などである」（白川同上書 166 頁）。

つまり「経」は、物事の「すじみち」すなわち物事の正しさ・道理・おさめるの意味をもつようになったといえる。

### 【営】

「もとの字は營に作り、音符はえい。その字形の上部のもとの字形は、<sup>かがりび</sup>篝火の形である。兵士たちの居住する兵舎や宮殿の前で篝火を燃やして警戒した、という意味である。営の下部の呂は、口（兵舎や宮殿などの建物の平面形）を二つ連ねた形で、営は軍隊や宮殿などの仕事にいそしみ努めることから、「営む」の意味となった。用例としては、「営業」は利益をえるためにいとなむ事業、「営造」は大きな建物などを造ること、「営田」は農業をいとなむこと、などがある」（同上書 26 頁）。

つまり、「営」は仕事にいそしみ努める意味をもつようになったといえる。

### 【済】

「もとの字は済に作り、音符は<sup>せい</sup>齊（<sup>さい</sup>齋）。齋（齋）の音がある。齊は神事に仕える婦人が髪に三本のかんざしを縦に通して髪飾りを整える形で、整え終わるの意味がある。済は水をわたって成るという意味から、成就する、「なる」の意味となる。国語では「すむ、すます」と読み、気が済む、借金を済ます、のよういう。用例としては、「済民」は民を救うこと、などがある」（同上書 242 頁）。

つまり、「済」は物事が「なる」ことでありそれによって物事が「すむ」という意味をもつようになったといえる。また、すくう・たすける、の意味も派生した。

## 2. 経営と経済；その語義

ここでは、まず、代表的な辞典により両語の意味を確認する。また、基礎的な教科書ではどのように規定されているかを確認しよう。

### 2.1 「経営」の語義

前節と重複するが、まず、『角川漢和中辞典』で、「経営」の字義と語義を簡単に振り返ってみよう。『角川漢和中辞典』[837～838 頁]では、

【経】 たて；たていと

織機のたて糸をまっすぐに張ったことを意味する。ひいてはすじ道の意となった。そこから道理の意になった。用例としてお経。

【営】軍隊の泊まるどころ、陣屋、兵営。

四方を取り囲んだ住居を意味する。後にそれをつくる意味になる。

【経営】は、

㊦けいえい；①家屋を建てる時、なわ張りして土地を測り土台をすえて造ること。

②事業を営む。またその事業。

㊦けいめい；①世話をやく（源氏物語夕顔）。

②ごちそうする。

とある。

次に、「経営」という語を『広辞苑』でひいてみると、「①力を尽くして物事を営むこと。工夫を凝らして建物などを造ること。太平記（11）『偏に後生菩薩の一を』。平家物語（7）『多日の—をむなしうして片時の灰燼となりはてぬ』、②あれこれと世話や準備をすること。忙しく奔走すること。今昔物語集（26）『房主（ぼうず）の僧、思ひ懸けずと云ひて—す』、③継続的・計画的に事業を遂行すること。特に、会社・商業など経済的活動を運営すること。また、そのための組織。『会社を—する』『—が行き詰る』『多角—』」とある。

つまり、「経営」とは、

(1) 力を尽くして物事を営むこと、工夫を凝らして建物を建てること

(2) あれこれと世話や準備をすること、忙しく奔走すること

(3) 継続的・計画的に事業を運営すること

なのである。

ここまでの定義は、世間一般的使用の場合の定義であると言えよう。次に「経営学」という専門的学問分野では「経営」はどのように定義されているのか。

『経営学大辞典』（中央経済社）で「経営」をひいてみると、次のような定義がされている。長いので要所を抜粋して引用しておく。

(1) 「…国民経済を構成する自律独立的な個別経済単位を経営とみなす…、経営の概念のなかには、企業のみでなく国家財政、地方財政や家計などの消費経済単位も含まれる。」これは、経営を「一つの社会単位とみなす、社会的範疇としての経営」である。

(2) 「経営は、労働力や生産手段を結合して一定の生産物を生産する技術的組織とみなされる。」これは「経済的範疇としての経営」である。

(3) 「経営は独立的な生産経済単位であり、財またはサービスの生産や配給に従事する経済的組織である」。これは経営を「組織的統一体すなわち組織として認識」する「組織的範疇としての経営」である。「近代管理論を代表するバーナード＝サイモン理論では、『経営とは、組織を形成し、運営すること』であり、また『経営とは意思決定である』と定義づけられている。」（189頁、占部都美稿）

つまり、経済を構成する個別経済単位であり、生産物を生産する技術的組織であり、経済的組織であるという。ここでは主に、経済を構成する要素としての経営、ということが定義されているのであり、経済と経営との関係が明らかにされていると言えよう。

次に、下谷正弘『経済学用語考』（日本経済評論社2014年）によってその語源をたどってみよう。それによれば、「経営」という語は、すでに中国最古の詩集である『詩経』のなかにそのままの形で現れているという。

たとえば、旅力方剛 経営四方（<sup>おお</sup>旅の力の<sup>まさ</sup>方に<sup>つよ</sup>剛ければ、四方を経営せしむ）。

あるいは、司馬遷の『史記』に、欲以力征経営天下 五年卒亡其国身死東城（力征を以て天下を経営せんと欲せしも、五年にして卒にその国を滅ぼし身東城に死す）などがある。

また、『大言通』では「経ハ繩張ナリ、営ハ其向背ヲ正スナリ」とある。

「経営」とはもともと「(1) なわを張り土台をすえて建物をつくること。縄張りして普請すること。また造園などの工事をすること」であった。そこから転じて、しだいに「(2) 物事のおおもとを定めて事業を行うこと」へ、あるいは「(3) 物事の準備やその実現のために大いにつとめはげむこと。特に接待のために奔走すること」、などへと変化したという（『日本国語大辞典』）。

「経」そのものの意味は、本来は「経緯（縦糸と横糸）のように「たていと」を示し、そこから多数の意味が派生している。「経世」とは世の秩序を正しくおさめることを意味した。

「経営」という語は、日本においてもすでに平安時代から使われてきた。いずれにしても「支度準備に奔走する」という意味で用いられていた。そして「経営」という言葉の意味内容は、時代の進展とともに、もとの「建物の造営」から次第に「物事の実現に向けて励む」、あるいは「努力してやりくりする」意味へと変化を遂げてきた。そういう意味の用語として固まってきた（下谷政弘、同上書、76～79頁）。

以上の指摘では、これまで諸辞典によって確認してきたところが経緯を含めて示されている。

そしてのちに、特に戦後、「経営学」が欧米から導入されたとき、Management；マネジメントの訳語として経営が定着したのだろうと推測される。

## 2.2 「経済」の語義

「経済」という語を『広辞苑』（岩波書店）を引いてみると、「①国を治め人民を救うこと、経国済民、政治。②（economy）人間の共同生活の基礎をなす財・サービスの生産・分配・消費の行為・過程、ならびにそれを通じて形成される人と人との社会関係の総体。転じて、金銭のやりくり。」とある。

『精選版日本国語大辞典』（小学館）によれば、「経済」は、

- ①「経国済民」または「経世済民」の略。国を治め、民を救済すること。政治。
- ②人間の共同生活を維持、発展させるために必要な、物質的財貨の生産、分配、消費などの活動。それらに関する施策。また、それらを通じて形成される社会関係をいう。
- ③金銭のやりくりをすること。
- ④費用やてまのかからないこと。費用やてまをかけないこと。また、そのさまをいう。儉約。節約。とある。

これら代表的な辞典は、「経済」の語源からその意味の変遷・広がりを示している。

では、高校の教科書では、「経済」をどのように説明しているか。次に二つの例をみよう。

「私たちが日々生きていくためには、経済活動を行うことが必要である。経済活動には、資本・労働・土地といった生産要素を使って、衣類・食物・住宅のような有形な財をつくったり、教育・医療・情報のような無形のサービスをつくりだす生産活動、生産した成果を生産要素の所有者に所得とし

て分ける分配活動、分配された所得を支出することによって人々が経済的欲求を満たす消費活動がある」(清水書院『新政治・経済』82頁)。

「私たちは、生活していくために、会社で働いたり事業を営んだりしてお金(所得)を手に入れ、それをもとに会社などが生産した衣料・食糧・住居などの財(モノ)・サービスを購入している。このように財・サービスが生産され、それらが流通し、私たちが消費するしくみのことを経済という」(第一学習社『政治・経済』90頁)。

つまり高校の教科書では、「経済」とは、人間が生きていくために行う生産・分配・消費の活動のことである、と言っているのである。

次に、専門的辞典である『経済学辞典第3版』(岩波書店)ではどうであろうか。「経済」をひいてみると、次のような定義がされている。長くなるが、引用しておく。

「(1) 定義 経済とは富の社会的再生産過程である。人間の物的欲求を満足させる物の性質を使用価値といい、それを持っているものを財という。自然状態のまま十分人間の欲求をみたしうる財を自由財、欲求との関係で希少な財を経済財という。経済財は直接生活の欲求をみたす消費財(生活資料)と財の生産のために用いられる生産財(生産手段)とに二分され、前者はまた必需品、便宜品、奢侈品にわかれるが、これらの区分は生産力水準と生活水準の変化とともに変化する。こうした多種の経済財の総体を富という。人間は一定の社会関係を通じて富を生産し分配し消費しつつ、その循環過程を通じて生活を物的に維持する。この総過程を経済というが、それを再生産過程として総括するのは、この過程の基底が生産であり、生産における社会関係(生産関係)が他の局面の関係を規定し、生産関係を通じて発揮される富の生産力が経済全体を方向づけるからである。」[杉原四郎稿 307～309頁]

要約すれば、つまり、人間が一定の社会関係を通じて富を生産し分配し消費し、生活を物的に維持する過程が「経済」であるという、わけである。その定義は、高校の教科書での定義と本質的に変わるところはない。

### 3. 語義の転換

しかし、「経営」という語も「経済」という語も、古くからのもの字義や語義から今日使われているそれに大きくその意味は転換している。したがって字面を見てもその内容がわからないのであるが、下谷政弘(前掲書, 2014年)によってその変遷をたどってみよう。

#### 3.1 「経済」の語義の転換

「今日の『経済』(economy)という言葉の由来についてはよく知られている。それはかつて中国の古典漢籍で用いられた『経世済民』、あるいは『経世済俗』や『経国済民』などという熟語(連語)の短縮形であったという。すなわち、それはもともと「世を<sup>おさ</sup>めて民を<sup>すく</sup>う」の意味内容に理解できる言葉であった」(下谷政弘, 前掲書, 51頁)。

「唐代以降になると短縮後の形としての『経済』の語そのものも…しばしば使われるようになった…。このように『経済』という用語のオリジンは中国の古典漢籍のなかに求められる。しかしながら、今日、日常一般に使われる日本語の『経済』にはそのような古典的な意味合いの痕跡はほとんど消

えてしまっている。そこからは、それがかつて『経世済民』の意味内容をもつ熟語であったことを嗅ぎ取るのはもはや困難である。つまり、今日の日本語における『経済』がもつ意味内容は、古典漢籍の『経世済民』からではなく、むしろ西洋語(英語の economy など)から来るようになっている。」(同上書, 52 頁)

「『一旦外来の英語の概念 (economy) に照らして訳語として成立すると、』(\* economy がもつ本来の一筆者)『固定した意味概念が込められてきて、勝手に字面通りに分解して理解できなくなる』(陳力衛『和製漢語の形成と展開』2001 年 277 頁)」(同上)。

「今日では日本語の『経済』がもつ意味内容はかつての漢籍用語のそれからは遠く隔たってしまった。むしろ、それは幕末・明治期に輸入された西洋語の概念のもとに鋳直されされてしまった。現代の日本語の『経済』には『節約』や『家政』などといった意味内容も含まれており、たとえば、徳富蘆花『思出の記』(1901 年)には『鈴江君の如きは余り経済家の方で無かった』、など出てくるが、この場合の『経済家』とは儉約家の意味であった。それらの新たな意味は、英語などの西洋語(本来は古典ギリシャ語…)の概念から生じたものであった。…『漢籍本来の意味をもっていながら…訳語として新たに意味を吹き込んで…新しい概念に使うことが主となって…漢籍の出典との関連がますます薄らいでいく』(陳力衛, 前掲書, 276 頁)…いわゆる『和製漢語』と称されるもの…まさしく『経済』とはそのような日本語の一つなのであり、その典型的なケースでもあった。」(同上書, 52 - 53 頁)

ちなみに、economy の語源は、J. J. ルソーの『政治経済学』によれば、「エコノミー (ECONOMIE) という言葉は、オイコス oikos—家と、nomos—法から来たもので、元来は家族全員の共同利益のためにする賢明にして法にかなった家政を意味するものでしかない。この言葉の意味は、その後、国家という大家族の管理にまで拡張されることとなった」(河野健二訳『政治経済学』岩波文庫)という(下谷政弘, 同上書, 53 頁)。

「かつて『経済』とはむしろ広い意味での『統治の術』としての政治、もしくは政治道徳に通ずる言葉であった」(同上書, 53 頁)。

「かつて本来的に『統治の術』たる政治や政治道徳などを表現してきた『経世済民 = <経済>』の字句は、一体どのような経過をたどって今日的な『経済』(economy) を表す用語として使われるようになったのか」(同上書, 54 頁)。

「『経済』という言葉そのものはすでに江戸期にはさかんに用いられていた。…江戸期には伝統的な『統治の術』や政治道徳として「経世済民 = <経済>」の思想が広く根付いていた。…大きな変化がもたらされるようになるのは、…幕末から明治期にかけてのことであった。…新たに西洋の経済学が輸入されはじめ、『経済(学)』の語は、『物の生産、物の集散、交換、流通、消費、資本、分配等々を体系的に解明する学問に名づけられた訳語に変貌』し始めた(進藤咲子『明治時代後の研究』70 頁)。…それは、統治の術としての伝統的な経済論<経世済民論>から、西洋的な市場経済を基礎にした経済学への転換であった」(下谷政弘, 同上書 55 ~ 59 頁)。

「その転換プロセスは必ずしも一足飛び…ではなかった。…はたして誰が最初に…『経済』という用語のなかに…そのような新たな意味内容を吹き込んで使いはじめたのであろうか。…『はつきりしない』(進藤咲子, 前掲書, 69 頁)」(下谷政弘, 前掲書, 60 ~ 64 頁)。

### 3.2 「経営」の語義の転換

『「経営」の語は長い時代を経るなかで、しだいに『努力してやりくりする (manage)』意味の用語として固まってきた。…その場合、…興味深い…のは、…以上にみてきた『経営』の語の用法は、今日的なそれとはやや異なったニュアンスをもつものであった…。『大陸経営』や『戦後経営』などの（\*第二次大戦前後の一筆者）歴史的熟語が示しているように『経営』は主として『政治・公的な儀式、また非営利的な組織体についてその運営を計画し実行すること』に用いられる言葉であった。『天下を経営する』などもその種の表現の一つであったろう。つまり、『経営』という言葉は私的な事象についてよりも、かつては『大陸経営』、『戦後経営』などむしろ公的あるいは非営利な目的に向けられる努力の方に用いることが多かった。それが今日では一転して、もっぱら『会社、商店、機関など、主として営利的・経済的目的のために設置された組織体を管理運営すること』が中心的な用法へと変化していったと指摘されている（以上、『日本国語大辞典』1208頁）。…こうした公から私へ、あるいは非営利から営利への変化には、戦後に輸入された『経営学』分野が急速に地歩を占めてきたことが影響しているものと推測される」（下谷政弘、前掲書、79～80頁）。

つまり、「経営」の語も、第二次大戦後の欧米の経営学の輸入によって大きくその語義を転換して今日のような意味で使われるようになったのである。

## 結 論

経済は、もともとは「経世済民」という用語を短縮したものである。その語義は、「世の中のすじ道を正し民を救う」という意味で、本来、政治のことを指す用語であった。それが、明治以後、西洋の *political economy* の訳語として「経済」をあてたところから、その語義は変化し、現在のよ様に「生産・分配・消費の活動の総体」というものとなった。

経営という用語は、古くから中国および日本でも使われていた用語であった。それは本来、「縄を張り建物をつくる」という意味であった。そこから、「物事を計画的に営む」という現在の意味が派生した。しかし「経営」の語も、特に戦後の欧米からの「経営学」の日本への輸入により営利「企業を運営する」意味で使われるようになったのである。

### 【違い】

経済と経営の違いは、視点の違いにあるだろう。「経済」が、人間のあらゆる活動を財やサービスに関わるものとして把握するのに対して、「経営」は、財・サービスの生産・分配・消費という視点からではなく、非営利・非経済的な諸活動も含めたあらゆる人間的活動の諸主体の運営の側面をとらえるものである。より広義にとらえれば、人間のどのような活動も、何らかのモノやサービスの消費をともなうものであるから、それは経済活動に含まれる。つまり、人間のあらゆる活動は、経済活動としてとらえられる。

### 【関係】

経済と経営の関係は、経済がさまざまな経営活動の総体的な結果であるのに対して、経営は、『経営学大辞典』がいうように、その経済を構成する一つ一つの単位の活動であるということにあるだろう。経営と経済の関係は、例えば、木と森の関係である。経営が一本一本の木々であるのに対してそれらが集まって形づくられる森にあたるのが経済である、という関係にあるだろう。

これは常識的なことかもしれないが、つまり「経済」とは世の中・社会全体の人間の諸活動のことでありそれを全体としてうまく運営していくことが課題なのである。それに対して、「経営」とは、一つ一つの組織や集団をうまく運営していくことであり、それが課題なのである。

大きな森が1本1本の木々から成っているように、経済は一つ一つの経営から成っているとたえることができるかもしれない。

また経営は、下図のように、営利組織の活動のみならず非営利の組織・個人の諸活動をも対象としている。

経	{	企業・会社・・営利・利益・・源泉…価値創造・付加価値
営	{	非企業・非営利団体・・・非営利

## 参考文献

- 下谷政弘『経済学用語考』日本評論社 2014年  
 井原久光『テキスト経営学〔第3版〕』ミネルヴァ書房 2008年  
 加護野忠男・吉村典久『1からの経営学』碩学会 2006年  
 白川静『常用字解〔第二版〕』平凡社 2003年  
 『広辞苑』岩波書店  
 『精選版日本国語大辞典』小学館  
 『角川漢和中辞典』角川書店  
 『経済学辞典第3版』岩波書店  
 『経営学大辞典』中央経済社  
 『高等学校改訂版 政治・経済』第一学習社  
 『高等学校 新政治・経済 改訂版』清水書院